
時間 トキ を越え

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間 トキ を越え

【Nコード】

N 8 6 3 9 Y

【作者名】

M 3

【あらすじ】

初代ボンゴレと十代ボンゴレ……ボンゴレリング“縦の時空軸の奇跡”が再び……！

序章（前書き）

初めて、初代ボンゴレを書いてみます（・A・:）
ご感想・ご意見頂ければ笑

あえて設定をいうならば、原作＋アニメ・至門編といったところ
です。なのでボンゴレV Gはないです！・初代と十代達は顔見知り
です！

小説『ボンゴレ？世の決意』の完全続編でよろしいかと……

では、お楽しみ下さいませっ（、´ヾ

序章

―並盛町、この地を陰となり陽となり支えている組織がある。

“ボンゴレファミリー”

このボンゴレファミリーボスを務めているのが、沢田綱吉。通称ツナ。優柔不断で小心者の彼は、中学時代こそ“ダメツナ”という愛称で冴えない日々を歩んでいた。

しかし、そんな彼に1人の世界最強のヒットマン（殺し屋）が現れる。

―呪われし赤ん坊、アルコバレーノのリボーン

彼は、いきなり家庭教師として現れるや否や、沢田綱吉に“ボンゴレ次期10代目候補”のだと語り、彼を立派なマフィアのボスとするため、特訓の日々を強いた……

そして沢田綱吉には…ボンゴレとしての、
大きな戦いの日々が待ち構えた……

マフィア反逆者六道骸率いる黒曜中との戦い

ボンゴレ独立特別暗殺部隊” V A R I A “とのボンゴレリング争奪戦

10年後の未来の世界、並盛とボンゴレの未来をかけた死闘、ミル
フィオーレとの戦い

あれから、短くも長い月日がながれた……現在の沢田綱吉は、マ
ファイア最強・ボンゴレファミリーのボス『ボンゴレ？世』だ。代々
受け継がれしボンゴレリングと、“未来の戦い”で出会った大切な
戦友であり、戦力のアニマルリング。今の沢田綱吉率いるボンゴレ
ファミリーは、この2つのリングを守護し、時に糧として、自分達
の町を守っている。

忘れてならないのが、沢田綱吉と共に数々の試練を乗り越えてきた
ボンゴレリングの守護者達だ。守護者は、ボンゴレリングを有する
6人の幹部を指す。必ずしもボンゴレファミリーに所属していなけ
ればならないという縛りはないが、ファミリーに危機が訪れた時に
は必ず6人の守護者が集められ、どんな困難でも乗り越えると言わ
れている。

ボスの沢田綱吉の持つ大空を筆頭に、嵐・雨・雲・晴・雷・霧と天
候になぞらえた7つのリングがあり、掟に基づいて代々ボンゴレフ
アマミリーボスとその守護者6人が所持してきた。

嵐の守護者―獄寺隼人。荒々しく吹き荒れる疾風、常に攻撃の核と
なり、休むことのない怒濤の嵐となるのが使命だ。彼は沢田綱吉の

右腕として恐れられている。

雨の守護者―山本武。

全てを洗い流す恵みの村雨、戦いを清算し、流れた血を洗い流す鎮魂歌の雨となることが彼の使命。ボンゴレ2大剣豪の1人と謳われている。

雲の守護者―雲雀恭弥。何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲となること。これが彼の使命だ。雲雀はボンゴレ最強の守護者とも言われている。

晴の守護者―笹川了平。使命は、ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で碎き、明るく照らす日輪となること。綱吉や獄寺・山本より1つ先輩だ。

雷の守護者―ランボ。

激しい一撃を秘めた雷電、雷電となるだけでなく、ファミリーへのダメージを一手に引き受け、消し去る避雷針となることが使命である。ランボは幼い子供だが、その実力は小さな身体に秘められまだ

まだそこ計り知れない…

霧の守護者―六道骸。

無いものを在るものとし、在るものを無いものとすることで敵を惑わし、ファミリアの実態をつかませない…まやかしの幻影となることを使命とする。かつては対立関係にあった骸。だが、“大空”は、すべてを包み込む存在でなくてはならない。沢田綱吉には…その度量があり、そんな沢田綱吉だからこそ、六道骸も、実態の掴めない幻影としていられる。

これが、ボンゴレ？世率いるボンゴレファミリアである。まだ若い
が、その実力はボンゴレ創設者達、初代ボンゴレファミリアとひけ
とらないだろう。その十代ボンゴレファミリアの姿に、マフィア界
では

“初代ボンゴレファミリアの再来”

と謳われ始めている……

序章（後書き）

気がつけば…銀魂と青の祓魔師の同時進行になった！！（。□。；）
やべえ！投稿やべー……

九代目より

海はその広がりに限りをしらず

貝は代を重ねその姿受け継ぎ

虹は時折現れはかなく消える

リングに刻まれし我らの時間

い
ま
に

い
ま

「……プリー……モ……」

「おい。ツナ」

「……ん……」

……

「起きろツナ！」

「っ？！……いつてえ……！！！」

「いつまで寝てやがんだツナ。仕事しろ」

「リボーン……いきなり蹴ることないだろ？！」

「いつまでも机でふて寝してやがるからだ」

「十代目、風邪を引かれます。お休みになられるならそろそろお帰りになれたほうが…」

「大丈夫だよ。獄寺くん……起こしてくれて良かったのに…」

「正式にボンゴレボスになってからまだ日が浅いですから……慣れない仕事にお疲れかと」

「う・うん……まさかまだ学生の俺達にまで仕事回してくるなんて……」

「あたりめーだ。学生だろうがなんだろうが……お前はもうマフィアのボスなんだ。自覚しやがれ」

「だから……俺はマフィアのためにボスになった覚えはないっていつも言ってるだろ」

「ツナ!! いるか?」

「?! 山本!」

「なんかよ。いまランニングから帰ってきたんだけど、校門にずけー怪しい人達立っててさ、声かけたらこんなのくれたぜ?!」

「声かけんなよ……手紙?」

「1」の印……」

「十代目、これ九代目からの手紙ですよ。」

「ん？そつなのか？んじゃ……さっきのボンゴレの人達か！」

「もう……高校まで来ないで欲しいよなあ……目立つちゃうよ」

現在、ボンゴレ？世とその守護者達の拠点は、並盛にある。本来ならば、正式にボンゴレを継承されたところで、イタリア本部へ行くところだが……ツナや守護者達の希望により、ボンゴレ日本支部という形で、並盛で活動を行っている。

とはいえ……ツナ達はやっと並盛高校に上がったばかりで、もちろんアジトも存在しない。そこで、高校の会議室の1つを内密に拝借し、ボンゴレアジトとしてやっている……。裏で手回したのは何故か

雲雀らしい……ツナ達は改めて、雲雀が並盛の何なのかが気になったところだ。

「ツナ。手紙にはなんて書いてあるんだ？」

「えっと……え？！ボ……ボンゴレ？世とその守護者は今週末……イ、イタリア本部に来るように……だって……」

「え？！」

「急……っすね……十代目」

「ホントだよ……学校……」

「大丈夫だぜ、ツナ。今週末は創立記念日挟むから連休だ」

「そっか…なら、よかつ……いや良くないよ！！みんなに知らせなきゃー！」

「九代目のことだ。たぶん雲雀や骸には直接手紙渡してると思っぞ。来るかどうか保証出来ねーけどな」

「リボン…！他人事みたいに言うなよ！…ん…大丈夫かな…あの2人」

「先輩には、俺が伝えるぜ、ツナ」

「ありがとう。山本」

「大丈夫つすよ。十代目、骸はなんだかんだ…声かければちゃんと顔出しますし…雲雀は雲雀で後から個人的に来てるんで」

「う・うん……」

「んじゃ俺、ランニング戻るな！ツナ」

「ありがとう。山本！」

「にしても…急になんすかね？九代目…」

「ホントだよ…イタリア本部は、俺達の留守の間はヴァリアーに頼んでたはずだけど……」

「まさかあいつら…俺達の居ない間にっ！」

「XANXUSに限って……ないと思うけど……」

ヴァリアーより

+++++ボンゴレイタリア本部

「う　　おい！！ボスはどこだああ！！」

デカい声のボリウムとともに部屋に入ってきたねは、スペルビ・スクアーロ。ヴァリアーの特攻隊長であり、山本の剣の師匠でもある。

部屋の中にはその他、ベルフェゴール、ルツスーリア、レヴィ・ア・タン、アルコバレーノのマーモンがいた。

「シッシッシッ！！ボスなら今風呂だぜ」

「何いい？！」

「あらスクア―ロ、どうかしたの？」

「悠長に構えてる暇はねえぞお！沢田達が帰ってくんだよ！！」

「「「？！」「」」

「うげっ…まじ？」

「ちょっと早く言ってよー!!」

「ボスの準備をしなくては!」

「あの六道骸がくるのかい?.....ボス...」

「騒がしいぞ...カス共が...」

「ボツ、ボスウ!!ふ、服をオオ!!」

「シシシシ！黙れよ変態。ボス、あのボンゴレ十代目が帰ってくるよ」

「……………」

「どおすんだあ？！ボス」

「カスが……………迎えてやれ……………手厚くな……………」

「……………了解……………」

本部へ

ツナ率いる十代ボンゴレファミリーは、イタリアにあるボンゴレ本部に到着した…。とはいっても、雲雀恭弥と六道骸は別行動。沢田綱吉・獄寺隼人・山本武・笹川了平・ランボだけで先に上陸するかたちになった。

「お帰りなさいませ！？世」

「お帰りをお待ちしておりました！」

「長旅ご苦労様です！」

「守護者の皆様もお疲れ様です！」

「ボス！お帰りなさいませ！」

ボンゴレ本部に仕える部下達の丁寧な出迎えに、ツナはいまだに慣れないところがあった…

「ははは…俺達…日本で特になんにもやってないんだけどな…ツナ」

「ホントだよ…どうにもまだ違和感が…」

「！十代目」

「！？」
「
「
「

シュツ！！！！

「え?!」

「下がれ! 沢田!」

「ツナ!」

獄寺達がツナからかばったのは…飛んできたナイフだった…

「シシシシ！さすがに継承しただけあって…少しは成長してるじゃん？！」

「……ベルフェゴール…てめえ」

「チャオ！まあ…ガキの時に比べたらイイ面構えになったじゃん♪
獄寺隼人…」

「っ！」

「まあまあ獄寺、ツナに怪我がなくて良かったじゃねーか」

「相変わらず甘えやローだあ…山本」

「スクアーロ！久しぶりだな！」

「まったく…甘ちゃんがぁ」

「あらゝ 笹川了平じゃないのゝ」

「おう！極限に元気にしたか？ルッスーリア！」

「なんだ…六道骸はいないのかい？」

「残念だったなバイパー…骸の奴は後から合流する」

「何度言えば分かるんだ。僕はマーモンだ」

「.....」

「.....XANXUS.....」

「.....」

「ひ、久しぶり……本部の監視……どうもありがとつ」

「てめえんとこの雲の守護者がいきなり来やがった………なんのつもりだ」

『雲雀さんが？………先に到着してたんだ』

「えっと………実は九代目から、守護者全員本部に集まるよう手紙が届いたんだ………だから………」

「………行くぞ………カス共………」

「バイビッ」

「沢田あゝ事が全て終わったら連絡入れろお」

「うん。ありがとう、スクアーロ」

「雲雀が先に来てたんだな！」

「みんな…本部に入ったからには、各自一回部屋に戻って指定スーツに着替え、会議室に来て」

「了解しました。十代目」

「OK！」

「すぐ行く、沢田」

「ランボは、俺の部屋において。俺が着替えさせてやるから」

「はい ランボさん！スーツ着ちゃうもんね」かつこいいもんね
」

「じゃ…約15分後くらいに会議室へお願いします」

「了解」

守護者集合

ツナとリボーン・ランボは会議室に向かっていた。

ツナは代々ボンゴレボスに受け継がれしボンゴレ？世のマントを羽織り、ランボは雷の守護者と分かりやすく、グリーンのシャツを身に付けスーツ姿に着替えた。一方のリボーンはいつもの同じのスーツだ。

ガチャ

「?!あれ」

「……やあ」

「雲雀さん！」

先に部屋に入っていたのは、雲雀恭弥。十代目雲の守護者である。雲雀も、雲の守護者と分かりやすいようにヴァイオレットのシャツに身を包んでいる

「チャオツス♪久しぶりだな。雲雀」

「元気だったかい？…赤ん坊。」

「雲雀さん……先に本部に到着してたんですね」

「六道骸と一緒に本部入りするのは嫌だったからね……」

ガチャ

「お待たせしました。十代目」

「なんだ。もういたのか雲雀」

「極限に早いな」

「君達が遅いんだよ」

レッドのシャツの獄寺、ブルーの山本、イエローの笹川と…各自属性の色のシャツに着替えゾクゾクと会議室に入ってきた。

「十代目、残るは骸だけです。」

「うーん……リボン。どうしよう」

「いつ来るかわかんねーからな。先に話しちまえ」

「そ・そうだね……さっき、全員の本部入りの報告も兼ねて、九代目に電話入れたら……」

主旨

「さつき、九代目に俺達の本部入りも兼ねて連絡したら……頼み事をされたんだ」

「頼み事っすか？十代目」

獄寺だけでなく、各自先の話が気になるようだ。

「う、うん。俺も初めて聞いたんだけど…ボンゴレでは、新しい代に変わること、ボスをはじめ各守護者も、肖像画として写真を1人1人撮るみたいなんだよね……」

「『え。』」

「いやだ」

雲雀だけでなく…みなあまりノリ気ではないらしい…

「ツナ……いくらなんでも…さすがにそれはちょっと、恥ずかしいぜ」

「うむ…極限に俺達死んでしまったみたいではないか！」

「それはいうな」

「だ…だよね…。でも、先代から…通ってる道…らしい…」

「帰る」

「雲雀——！！！」

「お前だけ逃げる気かあ——！！」

「我慢しろ！俺達だって恥ずかしいっ！」

「ちょっと……離してよ……」

「やっぱりこうなったな。ツナ」

「はあ……リボンも、長く九代目と付き合ってるんだから知ってたはずだよな……」

「ああ。まあな」

「言えよ!……」

「お前等もグチグチ言ってるねーで、とっととパシャリと撮って日本帰ればいいじゃねーか」

「……」小僧……」

「完全に他人事っすね……リボンさん……」

「うむ……だが一理ある! 並盛に飾るなら遠慮したいが、イタリアの

本部なら俺達はほとんど顔も出さんし、あってもなくても同じなのではないか？」

「くだらない…僕は帰るよ」

「その写真撮影だな……全て終わると世にも珍しい、面白いものが見れるらしいぞ。」

「「「「「??」」」」」

「ワオ……僕を退屈させないものかい？赤ん坊……」

「ああ。保証するぞ。雲雀」

「イイネ…じゃこは、そっちの一興に乗らせてもらつぷよ」

「ひ、雲雀さん……」

「あいつあれでいいのかよ……」

「あはは！意外と単純なのな」雲雀

「極限に褒美に弱いな……」

クフフフ……随分面白い話をしているじゃありませんか

「「「「?!」「」」」」

「骸!」

「……………ふん。」

「お久しぶりです。沢田綱吉」

「あ、うん。久しぶり…クロームは元気?」

「そんなことより先ほどの話……僕も乗らせて頂きます」

「え?!写真の話?」

「意外だな。骸」

「クフフ…なぜです？アルコバレーノ」

「マフィア嫌いのお前がマフィアの肖像になる写真撮影をするなんて思わなかったぞ」

「クフフフ…この僕だって本来なら御免被りたい所ですがね……愚かなマフィアボンゴレの軌跡をこの目で拝見しておくのも面白いかと。」

「…しょうがね…雲雀に骸が乗る気なんじゃ、俺達がやらねー訳には行かねーよな」

「十代目がやるんでしたら、俺は勿論やります。」

「ランボさん！パシャパシャ写真いゝばい撮るもんね」

「ランボ、俺達は撮る側じゃなく撮られる側だ」

「ブー。つまんないのー」

「えっと……わ、分かりました。じゃ決まったところで……とりあ
えず、肖像写真が飾られる場所まで行きましょうか」

肖像写真

.....

「ボンゴレにこんな部屋あったのな」

「うむ。普段はこんな奥まで来ないからな……」

「暗いもんね」

「」。「」。
「」。

「十代目、こちらの部屋ですか？」

「うん。うん。」

「俺はここに待つぞ」

「えっ?! ちょっと、リボーン」

「この扉の先は、ボンゴレボスとその守護者のみが入れる場所だ…
…あくまでヒットマンの俺は入れねえ。」

「はあ………わかったよ…みんな、いい?」

全員頷くと、ツナは、扉の取っ手に手をかけ扉を開けた

ギイ………

「すっげー！」

「極限に感無量だな！」

山本や笹川が驚くのも無理はない。

中に入ると横幅も奥行きも広く、上には、巨大な眩いシャンデリア。横の壁には、ボンゴレ？世代をスタートとして、？・？・？・？・？・？・？世代の各守護者たちの肖像写真、そしてレッドカーペツトの真つ直ぐ進んだ一番奥には、組織を支えてきたボスの写真が飾つてある。中でも……イタリア自警団として確立した『初代ボンゴレファミリー』の写真が最も大きく、最もその存在感を漂わせていた……

「写真いーぱいだもんね！！！」

「十代目、さすがに…これは…」

「うん…圧巻だね…」

「クフフ……目が眩しいですよ」

「……………」

「ホントすげーな、見てみるよ獄寺、各守護者ずつ写真が分かれてんな」

「ああ…中央の上空を核として、時計回りに嵐・雨・雲・晴・雷・霧の順番か…」

「うむ……やはり写真を撮るのが極限に恥ずかしくなってきたな」

「お、俺もだぜ」

「情けねえな…男に一言はなしだ」

「わかってるって！」

「……………？どうしました？十代目」

「……………うん。なんか…まじまじとボンゴレ？世を見た気がするなあって。」

「ああ、確かにな！」

「ボックスを開けるための継承時は、極限に時間が短かったからな」

ツナや獄寺たちは、いつの間にか…各初代の肖像写真の前にいた…

獄寺隼人は、初代嵐の守護者『G』

山本武は、初代雨の守護者『朝利雨月』

笹川了平は初代晴の守護者『ナツクル』

雲雀恭弥は初代雲の守護者『アラウディ』

ランボは初代雷の守護者『ランポウ』

六道骸は初代霧の守護者『D・スペード』

そして沢田綱吉は、初代ボンゴレボス、ボンゴレ？世こと『ジヨツト』の前に……

『ボンゴレにいる限り……一度でいいから、？世とゆっくり話がしたかったな……』

「?！」

ツナがそう思ったのと同時に、皆のリングから、それぞれの属性の色が溢れ出す

「なっ！リングが！」

「熱いぜ！」

「……………」の感じ……」

「百蘭戦の時と同じだぞ！」

「ぐぴゃ？！」

「何ですか？これは、沢田綱吉……………?!」

ツナの全身を、オレンジの炎が包み込んでいる…

「なっ！！何これ！」

「十代目！！！」

「ツナ！」

「沢田！」

「?!みんな！」

ツナ同様、獄寺には赤、山本には青、了平には黄、雲雀は紫、ラン
ボは緑、骸は紺の炎が身体を纏ってしまっている

「ツッナッ！！！」

ボッ！！

「「「「？！」「」」」

「お、おい…ランボが消えたぞ?!」

「極限にどうなってる!」

「ランボーー!」

「くっ
」!

「む、骸!」

「っ！」

「おい！雲雀！」

「雲雀——！！！」

「そんな、雲雀さん！！！」

ランボに続き、骸、雲雀までも炎に飲まれ姿を消してしまった

「う…おっ?！」

「先輩!!」

「お兄さん!!」

「ツナ!!」

「山本!!」

「ツナ！訳わかんねーけど、逃げろ！！」

「山本！！」

「そん……山本まで……？！！獄寺くん！」

「十代目！！」

「消えないで！獄寺くん！！」

「十代目っ」

ボッ！！

「獄っ……………みんな……………？なんで……………」

貝は代を重ねその姿を受け継ぐ

「?!」

リングに刻まれし我らの時間

「……いま……」

ツナは床に浮かび上がったのは、ボンゴレの紋章……ツナはそれを見たのと同時に、守護者たち同様炎に包まれ姿を消した。

初代

「っ！いっつっ……っ！……どっ！」

ツナが炎に包まれてから目を覚ました時……場所は、ボンゴレ本部ではなかった。どこかの……異室……

「そうだ……みんなを、探さなきゃ！」

目を覚ましたか??世。

「?!?!」

ツナの目の前に現れた男…ツナと同じマントを身につけ、金色に輝く瞳と髪、手にはグローブを付けている……その甲には、『?』のマークがある。

「プ…リーモ…?」

「久しぶりだな…」

「え、え?!?!なんで?!」

「大きくなつたな…デーチモ。マーレの小僧との戦いの時以来か？」

「は、まあ……プ、プリーモさん……なぜ」

「ん？お前たちが俺たちを呼んだのだろう？“この部屋で”」

「この部屋？いや…俺たちは、ボンゴレ本部の一番上の奥にある大きな部屋で」

「ああ。その部屋がここだ」

「???」

「お前たちの“時代”では、肖像画が飾られているんだな…驚いたぞ」

「お前たちの…時代??」

「この時代じゃ、この部屋は俺たちの会議室なんだ」

「この時代？会議室？………ち、ちょっと待って下さい！！もしかして…ここ…“過去”?!」

「その通りだ…デーチモ。」

「なんで?! なんで?!」

「デーチモたちは、ボンゴレリングにだけもたらされる“縦の時空軸の奇跡”にあったんだ。」

「?! 百蘭戦の時の」

「あの時は、どうしても俺たち側から、お前たちの前に姿を現したかった。ボンゴレリングの原型に戻してやりたくてな」

「あ!あの時は本当にありがとうございました。プリーモさんたちがいなかったら、百蘭にも勝てなかったです……」

「なに。俺たちの意志を継承してくれているんだ。あれくらい、なんてことはない」

「それにしても…俺たちは、ボンゴレリングの奇跡によって、過去に來ている。」と

「もどかしい話だが……お前たちの時代では、俺はすでに死者の身。リングの意識としてだけじゃ、俺たちはお前たちの力になってはやれない。だが…お前たちは生者。だからシッカリ過去まで飛ばされたのだろうな」

「ここが……古いボンゴレ……」

「お前は言ったな…一度ゆっくり話をしたかったと。その意見には俺も同感だ」

「っ？！みんなは……」

「……悪いな……デーチモ。守護者たちは、俺のファミリーの所に各自飛ばされてしまった。」

「え、じゃあみんな……初代守護者たちのところに……？」

出会った先で

「ッッナッ!ッッナッ!」

「……………」

「どこーだあー!ッッナッ!」

「ッッあッもう!ッるさいもの!」

「ぐぴゃ」

「なんで俺様がこんなガキの面倒見なきゃなんないんだものね」

「だから！ランボさんをバカにするな！」

「大体…何しに来たわけ？」

「ランボさん、お前なんかに用ないもんね」

「…ムカ……じゃなんでここにいるのさ」

「ランボさん、面白そうだからツナについてきたんだけどもんね！どこだもんね！お家帰る！」

「さっきからツナツナツナ……なに？缶詰め？」

「ツナ……！！！」

「……………んね」

……………

「ん……………?!ここは」

「動くな動くな。先ほど頭を強打したんだ」

「?!……………なんの……………これしき。……………それより、極限に……………は……………だ?」

「究極に俺の家だ」

「……この声…？！お、お前っ」

「ああ。究極に久しぶりだな！笹川了平」

「し…初代晴の守護者…ナックル…なのか？…夢でも見ているのか？？」

「ははは！相当混乱しているな。まあ、無理もない…驚いたぞ…任務のため城を出ていたが、いきなりお前が上から降ってきた」

「なに？！」

「その時、床に頭を打ってそのまま気を失ってしまったんで、家に一度連れて帰り様子を見ていた」

「うむ……俺達はボンゴレ本部で…写真を見ていたはずだが」

「プリーモから事情は全て聞いた、今から簡単に説明する。究極に落ち着いてよく聞けよ」

「頼む!!」

………

「いやあ…すんません。すっかりご厄介になっちまって。」

「なんのなんの。御主と拙者の仲でいねる」

「けど、任務の…途中だったんじゃ」

「他の者の任務に比べたら何てことないでござるよ。プリーモから、日本から持ってきてほしいと頼まれていたものがあって、渡すだけでござる」

「へえ…。しかし、うまいっすね」この和菓子とお茶

「ほお、山本殿はこの味が分かるとは！なかなか肥えた舌でござる」

「えへへ」まあな。うちは寿司屋だし」

「……………そうでござったな…」

「故人のあんたにも、俺ん家の寿司、食ってもらいてーなあ」

「……山本殿、先ほど話したここへ来た経緯は概ね理解出来ただろうか」

「……ああ。…他のみんなも、大丈夫だといいいんだけどな…」

「…拙者が知る限り…まずプリーモたちは大丈夫であろう。普段は城にいてござる」

「城…って…」

「そなた達でいう、ボンゴレ本部でござる。沢田綱吉殿も、おそらくプリーモと一緒にであろう」

「……ほっ。ツナ…良かったぜ」

「……………。あと…他の守護者だが…、ランポウは元々サボリ癖のある性格がある故…おそらく任務サボって家にいると思っでござる。最近はどうも反抗期らしい」

『んじゃ……ランボもひとまずは大丈夫かな……』

「ナツクルは城を出て任務をしている……少し心配でござるな。厄介な任務ではないと思うが……」

「……先輩。」

「あとはGでござる。フリーモのためとはいえ、いつも危険な橋を選んで渡ろうとする……。今回も喧嘩事に首突っ込んでいないといいのだが……」

『獄寺そっくりだな……』

「あと…^{デimon}Dでござるな」

「霧の守護者…骸がいるな…」

「デモンも大丈夫だと…言いたところだが…調べ物をしていて、守護者の中では一番城と離れてしまっている…連絡が取れづらいのが困りものでござる」

「調べものつすか？」

「デモンは、ボンゴレで人一倍仕事熱心でござる。」

『……………ん？…小僧からは、初代霧の守護者D・スぺードは、裏切り者だと聞いてただけだな…？間違いなのか？』

「えっと…最後、雲の守護者は？」

「…ああ、アラウデイ。うゝん……………実は、アラウデイの行動範囲・心理に関して、拙者達では、少々把握しきれていないところが昔からあるでござる。任務は毎回きちんとこなしているのだが…一体ど

「で何をしているのやら……」

『……雲雀そつくりだぜ……まあ、雲雀に限ってヘマはねえと思うけど……』

「そつ心配さなれるな、山本殿。いざとなっても我々初代の守護者がそばについているでござるよ」

「あ、はい……そつっすね。ありがとうございます。雨月さん」

出会った先で（後書き）

朝利雨月の他の守護者たちに対する一人称がわからない（・・・）
仲良さそうなんで呼び捨てで……今決めた（笑）

ツナ達が飛ばされた時代は、ボンゴレ結成全盛期なので、Dもまだ
反感を持つ前……って設定今決めた（笑）せっかくだからエレナ出
そうかな…

あ・知らない方すいません（「3」）リボーン最新巻読んで（笑）

次回はいよいよ！みんな大好き♪雲雀& a m p・アラウディ！骸&
a m p・D・スピード！

そして自分大好き 獄寺& a m p・G

出会った先で？

『なんで俺がこんなことに！！』

一方…嵐の守護者、獄寺隼人はイタリアの路地裏…何故か、貴族のお付きに追われていた

『チクシヨ！俺が何したってんだ！！』

グイッ！

「?!！」

獄寺は、後ろから不意にスーツの襟を掴まれた

「まったく、てめえは…過去まで来て何してやがんだ。」

「?!?!な!G?!！」

「シッ!」

「……………」。

「……………巻いたな。イタリアの道は入り組んでる。しばらくは見つからねーだろ」

「……ホントに……G、なのか？」

「あ？見りゃわかんだろ」

赤髪に顔半分を覆う刺青……口にはくわえ煙草。獄寺隼人の目の前にいるのは真正正銘、プリーモの右腕であり自分と同じ嵐の守護者、Gであった。

「なんで、てめえが……いや……そんなことよりなんで俺はイタリアに

「いんだよ！」

「少し落ち着け、バカが。ちゃんと話す。」

「……………十代目は……………」

「……………はぁ……………安心しろ。さっきプリーモに連絡とった。デーチモはプリーモと一緒に城にいる」

「……………そうか。良かった……………」

「俺の任務は一時中断だ。少し距離はあるが、城に戻るぞ……………歩きながら話す。」

「……………ああ。」

.....

「お茶です。」

「お気遣いなく。」

「.....。」

『何ですかこの沈黙は.....』

「.....D・スピードと言いましたか。初代霧の守護者。」

「.....そうですが?。」

「僕は、こんな書物に溢れかえった部屋に興味はないのですが……」

「ヌフフフ……君が興味あるのは、ボンゴレ。……ですか」

「わかっているなら、とつと案内してほしい」

「まあまあ……形はともかくとして、せつかく十代と初代が顔を会わせたのです。ここは、ゆっくりしていても罰は当たらないでしょう……」

「……はあ……それは……まあ」

『……どうなっている？この男。以前継承の時に一戦交えた時や、未
来での戦いの時の記憶の印象とはかなり違う……』

「霧の守護者……六道骸で、いいんですよね」

「あ。…ええ…」

『…これは作戦か？それにしても、奴の目つきも…少し』

「すみません。仕事の途中なので、待っていてもらえますか」

「構いませんよ。…僕も少し、考えることがありますから」

『…D・スピード。今までに僕が見てきた人物とは明らかに“何か”が違う…霧の術士と言えば、文字通りの性格は変わっていないが…確かこの男、初代ボンゴレボス、ボンゴレ？世のやり方に不満を持っていたようだが…今はどっちかというと…？！少し…“若い”？』

………

『……この町並みは、日本じゃないな……』

雲雀は、一人ゆっくりとイタリアの町並みを歩いて眺めていた。

しかし、雲雀のいるその町並みは……あまり見映えのいい感じでない。……人があまり町を歩いていない。人は見受けられるが、見た限り……お高くとまってる貴族のように見える……

雲雀も今は立派なスーツを着ていてなんとか浮いてはいないが、その貴族らの服は……雲雀からみたら、“無駄な装飾が邪魔くさい”“町並みに全く合っていない”

ガシッ

「?!?!」

「あ……」

おびえた声をあげたのは…

『？子供…』

雲雀の袖を掴んだのは、子供だった。だが、服も髪も、歩き回っている貴族らとは天と地ほど差があり質素で薄汚れている…

「……………なにか用」

「あ…………アラウディさん……………」

「?」

「おいおいこのガキ、どこから湧いて出やがった?」

「イヤだ！イヤだ！キタねー手で貴族の服に触んじゃねーよ」

「っ…………あ…………ごめんなさ」

「……………」。

さっきまで歩いていた貴族が雲雀と子供に絡んできた。するとさすが一軒の家から女性が出てきた

「アラン！！何してるの！……………も、申し訳ありません！」

「……………」。

「金ロクに稼げねード庶民が貴族の服掴むとは礼儀がなってねーな！な！兄ちゃん」

「……………」。

「あ…あなたは…アラウディ…さん？」

「？」

「おいあんた、このガキの母親か？この兄さんの袖、お前んとこのガキが握ったせいでシワになっちまったぜ」

「っ！」

「クリーニング代払いな！筋つつもんだろ？！それが」

「あ…あの…うち…この家の敷地の滞納もありまして…生活がつ！それに最近は物価も…」

「そりゃ…金がないからいけないんでしょうが。私達を見なさいな！土地が高かろうが、物価が高かろうが、こうして立派に生活を成している」

「っ。」

「……………」

「んじゃ母親のあんたが責任とるんだな！ド庶民の方が、アイロンかけるのがうまいだろ？！」

「あっ！！」

「カラダで責任とれ身体でっ！」

「いつ痛い……」

バキッ

「
「
「
「
？！
「
「
「

「君たち、僕の前で群れるなんて…イイ度胸だね…」

「ト…トンファー…」

「きつさま!!誰に手を出したかわかっているのか!」

「…さあ?誰、君。」

「なっ……何?!」

「君は…女性の風紀を乱した鉄槌も下さないかね」

「なっ!」

「さあ……誰から噛み殺そうかな……」

「わ…私達は…君の袖を掴んだそのガキを叱ってっ!」

「僕は頼んでないし、大きなお世話だ。それに、子を叱るのは他人じゃない。親だ」

「……………っ！」

「それに、君たちのは叱るとは言わない。何て言つか知ってるかい？……………“腹いせ”っていうだよ」

「……………」。

貴族達はそろそろ引いていってしまった。雲雀にしては珍しい、

“威圧”と“口”説得だった。

雲雀はさっさと歩き出したが、再び子供に袖を掴まれてしまった。

「……………。何」

「ありがとう！ありがとう！やっぱり強いや！アラウディさん」

「本当に、なんとお礼を申し上げます。アラウディさん“達”が姿を現してからは、この町も前ほど廃れなくなって…」

「違う」

「「？」」

「僕は」

人違いだ

「?!」

雲雀が振り向くと、遠くから歩いてくる男性。プラチナブロンドの髪にライトブルーの瞳…黒いロングコートに身を包んだ。雲雀同様、雲の守護者…

「アラウディ……さん??え?」

「その青年はジャポーネから来た。」

「お母さん…アラウディさんが2人いるよ…」

「ほ、ホントね…そっくり……ご、ごめんなさい!間違えてしまっ
てっ」

「……………」

「今日は、ボンゴレ門外顧問より通告があつてきた」

「……はい。」

「本日より、この市街は門外顧問の管理下とさせてもらうことになった。以後、依頼・要望・意見等は門外顧問を通し願う……。」

「?!……ほんっ……本当ですか？アラウディさんっ！」

アラウディは静かに頷くと、子供の母親は手で顔を覆い嗚咽し泣き始めた。アラウディは、そんな母親の姿を何も言わずただ見つめていた。……雲雀も。

「ありがとうございます。ありがとうございます！よろしくお願いします
致します！ありがとうございます」

「まだ早い…これからだ。君たちには、今まで以上に頑張ってもら
わなければ、我々が管理下に置く意味がない」

「はい。……はい、そうですね」

「以上だ」

「アラウディさん！！」

「……………」

「今度、僕んちのパン食べにきてよ!!サービスするからさ!」

「……………」

「みんな”誘ってさ!”」

アラウディが少し不服な顔を見ると、先ほどまで泣いていた母親は、美しい笑みを浮かべながら、

「ぜひ、みなさんには内緒で“お一人”でいらして下さい!」

アラウディは少し、柔らかい笑みをこぼし

「僕の舌を満足させてくれるかい？」

「もちろんです！」

「……このパン屋は、この町中じゃ少し名が知れてる“らしい”だからね……。楽しみにしてるよ」

アラウディはそういうと背を向け歩きはじめる……

「雲雀恭弥……今回の件を説明するよ。」

「……………」

去り際雲雀にアラウディはこう告げるとそそくさと歩く。

雲雀は黙ってアラウデイの後ろを歩いた。雲雀は後ろを振り向き、先ほどの母親と子供をみた。……2人は抱き合いながら、歡喜の涙を再び流しあっていた……

イタリアの町と1人の青年

「デーチモ、いい知らせだ。」

「え？」

「俺の仲間達から連絡があつた。お前の守護者達は無事だ」

「?!…はあ…よかつたあゝ！」

ボンゴレの拠点といえる城にいるのは初代ボス、プリーモ（?世）のジョットと、十代目ボス、デーチモ（?世）の沢田綱吉だ。ツナはプリーモの勧めもあつて、城で自分の仲間の安否を確認することにした。とはいえ、見知らぬ土地、ましてや過去のイタリアとなると…仲間の安否は気になった。プリーモの無事だという言葉に不安が1つ消えた……だが…もう1つツナには不安があつた

“どうやったら元の世界に戻るのか……”

フリーモのいう…ボンゴリングだけに起こる“縦の時間軸の奇跡”なら今回のタイムトラベルは頷ける。未来の百蘭戦で、ツナ達の絶体絶命のピンチに、フリーモ達はリングから姿を現し大きな力を与えてくれた経験があるからだ。しかし、フリーモ達はすぐに姿を消し、長居はなかった。フリーモはあの時確かに“真の後継者に力を貸してやりたいが生憎それは出来ない”と言った…。それはつまり、フリーモ達はツナ達の世界において物理的影響をもたらすことは出来ないということと考えられる。だが…今回のツナ達は違う…物に触れる・食べれる・飲める。フリーモ達の世界で完全に物理的に干渉してしまっている。ツナにはこの違いが全く分からない。

「デーチモ、どうした？」

「あ…いえ、早く…みんなの顔がみたいなあ…なんて…」

「クス…デーチモは、本当に仲間想いだな。」

「あはははは…」

「心配するな。俺の仲間達が、お前の守護者達を連れてくるよう言

ってある
「

『……………そういえば…』

「あ・あの……………」

「？」
「

「ずっと気になってたんですけど……………皆さんの“出会い”ってなんなのかなあ……………って。」

「？俺達のか？」

「あ・はい。皆さんが1人1人、ボンゴレに加わった理由っていうか…ボンゴレの誕生について」

「！ああ。」

「あ…いや、話にくい話なら、いいんですけど。」

「話難くなんてないさ…しかし、考えてみれば、他人に話したことはなかったな…」

「そ…そうなんですか？」

「ああ。なんせ、最近はそんな話をし合うほどの時間もさけていなかった」

「お、お忙しいですね……」

「……そうだな…歪んでしまったイタリアを正すのは容易ではなかった。」

「歪んでしまった…イタリア？」

「イタリアは、大きく貴族が平民で構成されている…場所によっては農民もいるかもしれないが…大体は貴族が平民だ。貴族の中でも上級・中級とさらに分かれる。」

「はあ…」

「俺とGがお馴染みなのは知っているな…」

「あ・はい。最初は2人でボンゴレを築き上げたって」

「ああ。実は、俺もGも元は貴族だった…この町は、俺とGの生まれ故郷なんだ。」

「…え、貴族?!」

「貴族とはいえ、俺達の末裔がな…だから他の貴族とは違い、権も財も雀の涙程度だ…だが、やはり幼い頃は他の平民の子より、衣食住・学問には困らなかつたな…。Gとは以前からご近所だった。俺もGも…この町が大好きだ。」

人々はみな温かく、子にも大人にも…貴族・平民隔たりなく優しく
ったからだ。みな生活は楽とはいえなかったが、町全体に絆があり、
“笑顔”だけは耐えなかった。その当時…“まだ”貴族の者と平民
の者では生活に大きな差があったため、互いに干渉することはな
った。」

ツナは、プリーモの人柄はこの町の人達の温かい力のおかげなのだ
と、聞いている自分も温かい気持ちになった。

「だが、徐々に貴族側はそういう訳にもいなくなってきた……」

「え??」

「デーチモ、平民と貴族との違いはなんだと思う」

「え?! うゝん……財産…ですか?」

「その財産をより多く手に入れるために、人々は何をする?」

「働きます」

「そうだ。」

「？」

「貴族と平民では金の稼ぎ方が大きく違う」

「?!」

「貴族とて、何もせずただワインを片手にのんびりしているだけでは金は湧いては来ない。使えば無くなる。無くなればまた作らなければならぬ。」

『た・確かに』

「平民は、店さえあれば労働力…つまり“働き口”がある。働き口があれば収入がある。収入があれば人は物を買う。物を買えば店は儲かる。それが社会だ」

「はい。分かります」

「しかも、この町は絆がある。困ってる人は、放っておけない。そういう人達なんだ」

「……………」。

ツナは、昔の日本も似たようなものだったのかなと思った。近隣との交流は、昔の日本もあったのだから……

「だが、貴族の社会は違う……色々あるが、主に他との契約で成り立ってる所が多い。」

「貿易みたいですね」

「そうだな。その貿易の会社のオーナーも数多くいる。いや……貴族はそういった形の方が多いかもしれない……貴族の生計と国の状況は隣合わせなんだ」

「国事態が不況だと貴族達の生活も苦しくなることが多いってことですか？」

「そんなところだ。貴族も悠長にしてられなくなった……そして標

的にされたのが、町の人々だ」

「えっ?! な　なんで…」

「貴族には、貿易会社のオーナーなどいるが…町の地主も数多くいた」

「地主……」

「そう。町で店を構えたりしている人々の土地の所有者だ」

「?! 土地の価格の請求を高くしたんだ!」

「……………」

「そ、そんな…」

「それだけでは飽きたらず、貿易に携わる者は物価をあげる……当然町の者達は材料費やらに出費が重なり、店を続けられにくくなる」

「町みんなが造ってきたバランスが崩されてしまったんですね…」

「……そうだ。貴族の者は、この手口に味をしめ、不況だろがなからうが所構わず金を町の人々から貪り、食らいつくようになった。」

「ひどい……ひどいよ！そんなのっ」

「俺もGも、見ていらなくなっていた……すでに、町から笑顔はなくな……一番ひどい時で一軒も店を開いていないときがあった。だが、貴族の連中の金の取り立ては続く……俺もGも、まだ若かったが、貴族の端くれだ。この力を使って、この状況を打破できまいかと、毎日語り合っていた……」

“貴族という強者の立場を、弱者のために使う”

ツナは、以前、九代目からプリーモ“ジョット”と相方“G”がボ

ンゴレを結成したのは、まだ十代前半の話だと聞いたことがあった。十代の若者が、“国の在り方”を変えようというのだ。ツナは、自分がもし、フリーモの立場なら、当然踏み切れない考えであり、行動するなんてそんな勇氣…自分のどこから湧くのだろう…と思った。

「ボンゴレという組織を立ち上げようと踏み切ったきっかけは、一人の青年にあったからだ。」

「…青年？」

「その青年とのきっかけは、町の者が、地主にイジメをあつていて、食うものに困っていると、小耳に挟み、微力ながら俺達が助太刀に行ったときだった。」

「……………」

「その青年が、そのイジメにあっている町の者の家に、“わざと”金を落としていったのを見た。」

「……………わざと、ですか？」

「それいつも、俺達と同じことを考えていたんだ。……とても嬉しかった。この町には、まだ“諦めていない者がいる”“この国を変えたい”と思っている者がいると思えたからだ。俺達は、すぐ久しくなり、お互い、国のため…町のために、ガキはガキなりに…手と手を取り合い動いていた」

「……………」

「けれど…やはり所詮はガキの気休めに過ぎず、貴族達の町のみなへのイジメはエスカレートしていく一方だった。逆らえば暴力…もう、医者も警察も、脅され機能しない。」

「……………っ。」

「そんなとき、俺達の友人の1人が殺された…」

「そんなっ！」

「店の商品を割引しなかったことで、暴力を振るわれたんだ……医者も警察も当然駆けつけられず………」

「たった……それだけのことで……ひどい……ひどすぎるよっ……！」

「俺達ももう我慢の限界だった……。なんとかしてやりたいっ……この命かえても。……そして、その青年は提案をしてきた」

“ ジョット……自警団を創るしかない ”

イタリアの町と1人の青年（後書き）

お気づきの方はいらっしゃるかもしれません！

そう！地味に出しました！シモン・コザアート……

組織

「……………自警団……」

ツナは、プリーモから自警団を創るまでの経緯を聞き……………自警団という言葉の重さを改めて噛み締めていた……………。噛み締めていると、自然と口から言葉を漏らしていた。

「青年は言った……1つ、組織を創るには、並外れたリーダーシップの素質を持っていないといけないと。雨も嵐をも包み込んでしまう大空のように……………そして、それは“俺”の中にあるといった。」

「……………。」

ツナはその意見には賛同だった。このプリーモが、“ずっと”ボンゴレにいてくれたら……………ツナは、何度そう思ったかしかない。

「だが、最初俺はリーダーになる気はなかった。」

「え？」

「俺は、すぐ人に情けをかけるし…組織という巨大なものの器に
しては、度量が小さ過ぎると思っていた。何より、自信がなかったよ。
俺は、Gの方が適任ではないか…と言った。もしくは、その青年だ
って…十分その素質はあった……」

『…………俺がずっと感じてきた感情に似てる。プリーモも、そんな
こと考えたんだ…………』

「またGが、俺をリーダーにすることになかなか首を縦に振ってく
れなくてな……」

「え?! 意外だ!」

「Gも、俺と同じことを考えていた…」

………

「プリーモの奴は、昔から優しいを通り越してお人良しだった。」

嵐の守護者、Gと獄寺隼人は、イタリアの狭い入り組んだ路地を、
プリーモやツナがいる城目指して歩いていた……

「……………」

獄寺は、Gの話をただ黙って聞いていた…。

「そんなお人良しが、組織のボスになったところで、敵には舐められるし……いざという時迅速な判断ができない。気の緩みが命取りになる時だってある。プリーモが早死にするだけだと考えたんだ……」

「その自警団創ろうと言い出した奴にボス任せりゃ良かったじゃないか」

「俺もそれを提案した。……ジョットは……俺を推薦していたが……俺は組織のてっぺんに立つ柄でもねーし」

「そしたら？」

……

「彼は言ったよ。“もちろん、ジヨットだけには背負わせない。イタリアは広い。俺は南部の方を助けに行く。ここはジヨットとGに任せる”とね」

「じゃその青年は、イタリアの南のほうに行っちゃったんですね…」

「ああ。近況と情報を互いに交換するためたまに文通はやってるけどな」

「へえ…。」

「俺とGしか残されていない。だが…やはりGはOKしてくれなかったんだ。Gとは本当に長いこと一緒やってきたが、あんなに互いの意見が対立したのは…最初で最後だったかもな。」

.....

「俺は、長いことプリーモと一緒にいた…だからプリーモの人を惹き付ける力は誰よりも認める。だからこそ、あいつには組織のボスからは手を引いてもらいたかった」

「……………」

「イイ奴も、悪い奴すらも…あいつは許すだろう…もし命狙われたとしても…時を経たら、あいつは心開いてしまっだろう。そんなんじゃないくつ命あつてもたんねーし、俺は、ジョットを危険な目だけに遭わせたくないかった」

「……………十代目と同じだ…。かつて十代目の身体を手に入れようと戦ってきた骸。完全に消しにきたXANXUS。だが十代目は…骸を霧の守護者に、XANXUSには本部までいま任せてる始末。十代目は…確かに心の広いお方だ。“人”を大切にするあのお方だからこそ、俺も命捧げてあの人に付いていける。だが…十代目は時々自分を省みず、身の危険の中に自ら向かっていかれる時がある。」

ヒヤヒヤした瞬間は何度かあった。……………だが……だっただら……」

「その様子だと、デーチモにも似たようなことがあるみたいだな」

「……………ふん。」

「だったら分かるだろ。最初、俺がジョットをボスにさせたくなかった心境が」

「わかんねーな」

「?!」

「悪いが俺にはわからねー……確かに、俺も十代目が継承なさるとき、今までに感じたことのない“不安”つつものを感じたけど、それは……十代目がどうこうじゃなくて“俺”が未熟だからそう感じるだけだと思った」

『……………。』

「十代目が危ない時は、俺が守ればいい。十代目が迷っているときは、俺も一緒に考えればいい。継承前日、正直、あの時の俺には…そう考えることが出来てなかった…。この身全て捧げて十代目と共にボンゴレをまとめ上げる力も知恵も俺に備わってる自信がなかった…。だが…十代目はそんな俺でもいいと言ってくれた…。あの方は、いつもありのままの俺達を信じてくれてんのに、その俺達が未熟なんて考えてんなんて情けねえ話だ。俺は、“未熟な自分”を考えるのを止めた。あとは…もう簡単だ。十代目のお側に立ち、お守り続ける、死ぬまでな。」

『……………こいつ。』

「どうやら、十代嵐の守護者を少し甘く見てたみてーだな……。リングに継承の証を授けた時とは、随分変わったようだ」

「たりめーだ。いつまでもガキじゃねーぜ」

『俺がジヨットの自警団のボスを許した理由は……ジヨットが、町の奴の1人に“これから俺達が町を守る。だから、全て安心してみんなは…笑顔でいてくれ”と言ったときだった。あの時のジヨットの目は…たぶん、一生…忘れねーだろうな。こいつは………最初からデーチモに“賭けて”たのか。さすがは、俺達の意志を継ぐ者と

いったところか……。』

.....

「Gは…どうしてボスになることを許してくれたんですか？」

「……さあな？」

「えっ?!」

「“どうせお前のことだから、無茶ばかりするだろ、俺は側で援護する” だと言っただけだからな……」

「……はあ。」

「まあ…なんとかそれで、自警団を開始することが出来た。初めは、

ボンゴレの名はなかった…初めるからには、その前に人を集めなければならぬ。俺とGは、とにかく町の人々に自警団の宣伝がてら、適正な人物はいないものと聞き込みをすることにした」

「自警団の…宣伝？」

「ああ。町の人に受け入れてもらわなければ…意味がないからな。だが…世の中はなかなか、上手くいくわけではなくてな……。所詮ガキに何が出来ると何度言われたことか……。言われるたびに、フオローを入れてくれたGがいてくれて、本当に助かってな。」

「だから、挫けず頑張ってこれたんですね！」

「ああ。もちろんだ……。…そんなある日、ある1人の男の話を聞いた。」

「ある1人の男？」

「その男は…… たった1人で」この国と戦っていた……その名は「

—アラウディ。

…孤高の…

「アラウディ……」

『確か、初代雲の守護者の人だ……。』

「アラウディは、俺達より少し年上だが…聞くところだと、その若さにして歴代最年少で国の諜報部のトップを務めていた…」

「…諜報？」

「諜報とは、様々な情報を探ったり知らせたりする人のことだ」

「?!スパイってこと？」

「そうともいうな。」

「す…すげー…」

「ああ。すごいことだ…。アラウディの家では、代々諜報部を受け持っているらしい、だから、当時アラウディの名はかなり表の世界でも裏の世界でも知られていた…。」

「それって……スパイとしてはどうなんですか？」

「そう思うのも無理はない。だが……そこでアラウディがすごいのは、名以外の情報が全く露見されないことだった。」

「え?! 絶対ですか?」

「絶対だ。だから、俺もGも苦労したさ…アラウディと名は知っているが、外見・年齢・性格等の特徴が分からないから捜しようがなかった。諜報部の情報なんてさらにガードが堅く、どのくらいの規

模で、どう活動しているかも不明……。とにかく、アラウディは本当に自分のことは話さない。部下にまで自分のことは話してないときく。まさに“掴み所のない雲”なんだ。」

「……やっぱり、初代と俺達って似てるのかな？……今の話聞いていると、雲雀さんそっくりだ。」

「

なるほど……でも、なんで“孤高の”浮き雲なんですか？」

「アラウディは……表の世界の情報の管理等は部下にやらせてもらしいが、裏の世界の情報や、現地へ足を運ぶ際は、必ず……トップであるアラウディ“1人”だけで行っんだ……」

「1人だけ……」

「そう。たとえば、戦闘になると見込んでも、必ず1人だ。」

「なんで、そんなこと……」

「これは……あくまで長年アラウディを見てきた俺の見解だが、たぶん、その方が“確実”だからだと思う」

「どづいつことですか？」

「“信じるものは己のみ”ということだ……自分の力こそ、最もアラウディ自身が信じられるものだからだと、俺は思っている」

「……………そんな」

「アラウディの立場上、俺は…アラウディのその思考は仕方ないと思っっている。諜報部は…デーチモの言うとおり所謂スパイの世界。扱っているのが目に見えぬ“情報”というものだけあって…自分達がいっつ弱い立場に立たされるか分からないから…気の抜けない世界だ」

ツナは…聞いて想像するだけで、胸が詰まる思いがした。そんな世界で、若くから身を置くアラウディは、どれだけ精神が強いのだろうと思った。アラウディがかつて、ボンゴレ最強の守護者と謳われた訳が、十二分に理解出来た瞬間だった。

「自分達の部下の中にも、もしかしたら…内通する者が隠れているかもしれない。」

アラウディは…そこまで考えて動いていたそうだ…

— 僕の邪魔者は…たとえ味方であれ、己の“正義”の下に叩き潰す—
これは、アラウディの口癖だ…行動するとき、必ず1人だけな理由が頷けるだろ？」

『なんか…さりげにすごい口癖聞いちゃったけど、』

「うーん……。なんか…可哀相な境遇の人だなあって…思います。」

「そうか。…デーチモは優しいな。大丈夫だ…アラウデイは、そんな日々が楽しくて仕方ないんだよ」

「……………え。」

「そのスリルが、アラウデイの生き甲斐であり…楽しみでもあるらしい。……クス…変わり者だろ？」

『っていつか、まんま雲雀さんだよ!!…雲雀さんがアラウディに似てるのか、アラウディが雲雀さんに似てるのか分からなくなってきた!』

「でも、そんなアラウディさんにどうやって出会って、どうやって自警団に入れたんですか？」

「うーん…正確にいうと、アラウディが正式に自警団として動くようになってくれたのは、大分後の話だ。たしか…半分自警団からボンゴレの名の話が上がってきたくらいときだったかな……」

『遅っ!!!』

「え・じゃあそれまで何を」

「いや…本当にアラウディを見つけ出すのに骨が折れたから、Gとの作戦で、アラウディから俺達に姿を現せさせようということになったんだ。」

「えっと…つまり？」

「自警団として、俺達の名が滞れば、諜報部としてアラウディが黙ってないだろうと踏み、アラウディから俺達に会い来るのを待とうということに決めた」

「な、なるほど……」

『プリーモらしいなあ。』

「アラウディを自警団候補としておき、再び、俺達は人材を捜した。時間はなかったから、かなり焦っていてな……困っていた俺達に手を差し伸べてくれたのは、予想外に、遠方から来た親友だった」

「…どこから？」

「ジャポ―ネの親友、

朝利雨月だ

…恵みの村雨…

「プリーモとの出会いって聞いてもいいか？」

山本は、緑茶を啜りながら、向かいに座る初代雨の守護者、朝利雨月に話を聞いてみた。

「ん？プリーモとの出会いでござるか？」

「ああ。なんとなく気になるんだ」

「なんてことはないでござる……プリーモがまだ若かりし頃、家の都合で日本に來日した時でござった。」

「ん？でもその時代の日本って……」

『まだ侍歩いてんじゃ……』

「？どうかしたか？」

「い・いや、なんでもねっ！続けてくれ」

「拙者はいつものように家で大好きな笛を吹いていたでござる。」

「そつか！音楽が大好きだもんな！」

「左様。その時、いきなり、金色の髪をした青年が家を訪ねてきたでござる。」

.....

「雨月の笛の音は素晴らしかった。来日して、日本を目にして、可憐で素晴らしい国だと、感心していた。日本の笛の音色を初めて聞いたというもあり、吹いている主の顔が見たくなって家を訪ねてみたんだ」

『プリーモって…意外と行動的…』

………

「しかし、会って早々に焦った…なにせ言葉が分からない」

「イタリア語だもんな…」

「しかし、プリーモは、見る限り…ただ拙者の笛の音が聞きたそうな様子でござった。だから、しばらく拙者は何曲かプリーモに笛の演奏をしたでござる。」

「なんかいいよねーそういうの！言葉の壁超えたって感じで。」

「しかし、その時プリーモは、曲の聞くだけ聞き何も言わず行ってしまったでござる。」

「え・」

.....
「雨月の音楽を聞きたくて、俺は…必ずまた会いに行く」と心に決めた。そして次は…ぜひ言葉を交わしたいと思い、イタリアで日本語の勉強を始めた」

「へえ〜！そのくらい朝利雨月って笛が上手なんだ」

「ああ。うまいぞ。雨月が来たら笛を吹いてもらうつといい」

「はい！」

.....
「フリーモが再び家に来た時は拙者も驚いたが、きっと、拙者の笛を気に入ってくれたのだと、すぐわかったでござる。フリーモは少し日本語の勉強もしていてくれた」

「へえ〜！」

「名と、拙者の笛を好きだと言ってくれたこと。たどたどしい日本語でプリーモはそう拙者に語った。本当に嬉しかったでござる。拙者もプリーモと会話をしたい！その一心から、イタリア語の勉強をしたでござる。」

「む、難しかったんじゃないっすか?!」

「無論かなり骨が折れたでござるよ…プリーモから、イタリア語の50音順のような表をもらっていて、まずは読み書きから入ったのを覚えているでござる。」

「あはは！昔の人だよな！」

「おかげで、文までは、なんとか互いの言葉で済むようになったでいじろ。」

「すげー!~!」

『やっぱ、昔の人って頭いいのな』

「プリーモの自警団を創る話も、文から知ったことごとござる……プリーモは素直に、創る苦悩や悩みを文に綴っていた。」

……

「そして、ある一枚の手紙をきっかけに、雨月との文通は“一端途切れるんだ。”」

「……え？」

「それは、雨月からの手紙だった。」

——拝啓 ジョット殿

そなたの母国の情勢を文で拝見致して、実に身を割かれる想いであった。ジョットとGの故郷を救う試みに、拙者も微力ながら助太刀致したいと思うている所存だ。きつと、ジョットならば、自警団をまとめられると、異国を代表として推薦する。…拙者はいつ・いかなる悩みでも力になる故、そなたは溜め込めず、必ず拙者に近況を報告して欲しい。……必ず。拙者は、全て整えて、待っている。

敬具

朝利雨月

「この手紙で、俺は雨月の心意が分からないでいた。近況を教えて欲しいと頼む雨月に対して、俺は言われた通り雨月に手紙でたびたび近況を伝えてはいたが、雨月からの返事は来なかったからだ」

「え？ど、どうして…」

「俺もその疑問が絶えなかったが、雨月からの連絡が途絶えて半年後に俺は“雨月の答え”を知ることになる。」

『???半年後...』

「雨月が、イタリアに来たのだ」

「え?!」

「自警団が形成を成してきた時だった。確かその時にはすでにランポウもナツクルもいたかな...」

『初代雷の守護者と、晴の守護者だ...』

「でも、なんで...?」

.....

「プリーモが自警団を創ると文に書いてあったとき、拙者の中では...イタリアまで足を運ぶことにまだ迷いがあった...」

「じゃあ、なんでなんだ?」

「一つは、フリーモのイタリアの情勢に、当時の日本もやや似ていた…からか、フリーモの気持ちに拙者にはよく分かったでござる…拙者も一応…武士の端くれであつたが、農民皆の住み心地のつらさは、一目瞭然だったでござつた。だが、拙者は…何も出来なかつた。いや…何もしなかつたと言つた方が正しいか…」

『やっぱ武士だったのか…この人…』

「人を斬る覚悟もなく、農民も助けられず、ただ笛を吹くしか出来なかつた拙者にとつて…フリーモは実に大きな存在であつた。町民者のために自ら動く。拙者に出来なかつたことをフリーモは命懸けで行おうとしている。」

「それで、手を貸してやりたいってことか……」

『…この人は人が斬れないっていった…けど、この人の剣は確かに誰もが認める太刀だ。きつと…斬れねーんだ。この人。武士だからつて…むやみに人をやらない人なんだ…』

「2つ目は、フリーモからの手紙でござつた」

「手紙？」

「自警団を立ち上げた方がいいが、人材に苦しんでいたとの内容だったが、同時に」

―朝利雨月、たまに、お前の笛の音が聞きたくなるときがあるのだ。苦しむとき、悩めるとき、傷心した俺の心を癒やしてくれたのは、お前の笛の音だった…お前の音は、迷う俺に、いつも1つの道標を見せてくれるのだ。どうやら俺は…お前の笛の音無しでは何もできない男になってしまったようだな…。雨月、日本の今日の天気はどうだ？イタリアでは昨晚から雨が降っているんだ。だから、雨月のことを考えてしまったのかもな。

…雨月の笛の音は、この雨のようだな…静かで、全てを洗い流し、再生する機会をくれる。自警団の人材は難しい局面だが…この雨が止み、晴れたら、新しい光が俺達を照らしてくれるだろう。

「……………」

「拙者が、その光になりたいと思った。異国の親友が、心を悩めている、苦しんでいる。拙者に出来ることがあの友にあるのなら…。そう思ったら、身も心もイタリアいるプリーモに向いていたでござる。とはいえ、異国へ行く船は莫大な時間と金がかかる…プリーモ

のもとを訪れるのに半年もかかってしまった」

「けど、あんたは、プリーモの“雨”になりたかったんだな」

「…左様。戦いを清算し、全てを洗い流す鎮静の雨でござるよ。…
山本殿」

「あはは！だな！わかってるさ、朝利雨月。」

ジョット…そなたからの文を読んでいたとき、こちらの天気も雨であつたよ……

我が儘な…

「雨月さんとの出会いは素敵ですね」

「そうだな…異国だから尚更なのかも知れない。」

「そういえば、雨月さんがイタリアに来るまでに半年かかったんですよね？」

「ああ…確かそのくらいだ。」

「その間に、晴の守護者と雷の守護者も自警団に加わったんですか？」

「ナックルとランポウか？そうだ。ナックルはともかくとして、ランポウは預けられたと言っべきか……」

「預けられた？」

「はあ…全く、なんでこの俺様がこの鼻たれ小僧を」

「うゝゝっ！だあゝゝランボさんをバカにするなあっ！」

「はあ…全くめんどくさいものねえ」

「ツナあゝゝ！！」

「まだ出たものね缶詰め…」

「ツナ缶詰めじゃないもんね！」

「全くさゝ…こんな小僧がこの俺様の雷の守護者の継承者なんてさ
ゝやってられないものね」

「……なんかもう俺様だけ帰ろうかなゝ…」

「預けられた…って…」

「ランポウの家は、大地主なんだ」

「金持ち?!」

「そうだ。ランポウはその家の御曹司の一人息子……出会った時それは我が儘でな…年齢もちょうど反抗期ってやつなのか、ランポウの親も手を焼いているようだった……」

「地主の息子ってことは、自警団とは敵対関係なんじゃ……」

「ああ…。だから最初は俺達もランポウをかなり警戒してかかってたんだ。そうしたら、ある日ランポウの奴…大号泣し出したんだ。俺達の前で」

「泣いた?!なんで?!」

「…Gの威嚇が…非常に怖かったらしい」

「え・それだけで…?」

「貴族が故に…ランポウは厳しいこの世を知らない。ただ人に臆病者なだけなんだよ」

『あ。そういえばリボーンが、初代雷の守護者は世間知らずの臆病者だって……』

「ランポウは…ただ、人恋しかったただけなんだ。だが、人を惹き付けるにはどうしたらいいのか…。教えてもらってきていない。それが分かった」

「地位やお金でなんとかしちゃうってやつですか?」

「ははは…まあそんなところだ。年下だからなのか…そうわかってからというもののランポウが可愛く見えてな。自警団に入るという形で…面倒を見ることにしたんだ」

『面倒見良さそうだもんなあ〜プリーモ』

「あの…Gは…」

「ああ…それはもちろん大反対だ…」

『やつぱり……』

「自警団には、上級貴族もいた方が小回りがきく可能性がある…必要な人材だと言いくるめてなんとか、な…」

『獄寺くんとランボも…取っ付きあいばっかやってるもんなあ』

「まあGも…見てくれあんな成りだが、面倒見は割と良い方だからすぐ慣れるだろうと思ったのも事実だ」

………

「ねえ〜ねえ〜！どこ行くの?!ランボさん達どこ行くの?!」

「うるさいものね…プリーモのどこに決まってるものね」

「プリン?!ランボさん!プリン大好きだもんね!」

「……………」

『はぁ…めんどくさっ!プリーモの命令じゃなきゃ絶対こんなガキとなんか歩かないものね……』

…優しくて…強い。憧れるプリーモ…誰からも呆れられて…ほったらかしのままだった、自分でもわかってた。そんなどうしようもない俺を、プリーモは心からいつも必要としてくれた。そのプリーモだから…俺様は、プリーモの言うことはちゃんと聞いてるものね…。

『

「……………はぁ…早く…プリーモのどこに行きたいものね……………」

「ツナあ~~~~!!」

「……………」

「じゃ…臆病者なのに戦いの時前線に出させてたのは？」

「ああ…ランポウは臆病者なんだが、目立ちたがり屋だからだ。」

『そんな理由なの?!!』

「雷の守護者って…変わってますよね…」

「あはは。そうだな…デーチモ。守護者みな変わり者ばかりだ」

「…みんな、個性派揃いです。」

「デーチモの守護者は、俺の守護者達によく似ている」

チリリリ…

「?!」

「すまない。電話だ。」

「あ、はい!」

「俺だ……ああ。……わかった。ご苦労だったな……くれぐれも、気をつけて帰って来い」

「?」

「デーチモ、ナックルからだ。もつすぐこちらに到着するぞうだ」

「晴の守護者の人だ！」

『ということは、お兄さんだ！』

「ああ。良かったな…デーチモ」

「はい！—安心です」

晴れた心

「沢田！！」

数分後、先に城に到着したのは初代晴の守護者と十代晴の守護者だ。

「お兄さん！良かったあゝ無事だったんですね」

「極限になんとかな…話を聞いて驚いたぞ！ここは過去なのだろう？」

「みたいですね……ボンゴレリングだけに起こる“縦の時間軸の奇跡”だとか。」

「俺達、元の世界に帰れるのか？」

「……さあ…今の段階ではなんとも」

話すツナと了平のそばに、初代晴の守護者はスウツと近づいてきた。

「デーチモ。改めて、晴の守護者ナツクルだ」

「あ、沢田綱吉です。お兄さんありがとうございました！」

「なんのなんの！究極に俺達の仲ではないか」

「ナツクル、ご苦労だったな」

「？…プリーモ、アラウディから連絡は来てないか？」

「アラウディ？…いや、唯一連絡無いのはアラウディだけだが…」

『？！……雲雀さん、大丈夫かな？』

「全く…デーチモの雲の守護者を保護したかまだか…らしいの連絡は絶対に入れると究極にあれだけ念を押したというのに…！」

「構わん。アラウディのことだ…きちんと任務をこなした上で、雲の守護者の方も探してくれているはずだ」

「もしかしたら、アラウディのやつ…CEDEFに寄るのではないか？」

「…有り得るな」

「沢田、CEDEFとは…」

「はい…初代雲の守護者、アラウディが設置したボンゴレ門外顧問組織です」

正式名称は「Consulenza Esterna Della Famiglia」。通称・門外顧問チーム。普段はファミリーに所属しないが、非常時にはボスに次ぐ権利を持つ実質上No.2の門外顧問が率いる組織。7、8人で組織される少数精鋭部隊で、主に諜報活動を行う。表向きはダミー会社として一般企業を装っている

「確か、今のボスは沢田の父ではなかったか？」

現在、ボンゴレ門外顧問C E D E Fのボスを勤めているのは沢田綱吉の実父沢田家光だ。

「ええ…まあ…とはいえ本当にほとんど会いませんけど…こっちは日本支部、向こうは本部支部で動いてますから」

「そうか。確か、ナツクルとアラウディは共に城を出たんだったな…」

「行き先途中まで同じだったからな」

「お二人は仲がいいんですか？」

「…というか…奴とは腐れ縁だな」

「腐れ縁……？」

「ちょうどいい。ナックル、お前のボンゴレに入るまでの経緯をデイチモ達に話してやってはくれないか？」

「ん？俺のか？」

「ああ。ちょうど、みんながボンゴレに入るまでをデイチモに聞かせていたところなんだ」

「なるほどな……。俺がボンゴレに入るまでを語るなら、俺のことも話さなきゃだな。」

「俺も聞いてよいのか？」

「もちろんだ。笹川了平……お前もボクサーならば、聞いておくべきだ」

「？！………つむ。」

「俺も笹川了平同様、ボクサーだった。」

「もちろん知っているぞ！！無敗の記録を誇っていたのだろう？！
極限に尊敬するぞ！」

「あははは！まあな」

「イタリアでも、ナックルの名はかなり知られていたな」

「プリーモはそう言い、部下に茶菓子を頼むとソファアの上に腰掛けた。」

「…だが、その先は、お前達も知っているはずだ」

「「?!」」

ツナと了平の顔が一気に沈む。言い伝えでは……

「……人を殺めてしまった……と」

「……。そうだ、俺は試合中に相手選手を殺めた」

「だが、試合であろう!! ボクシングは命の危険と隣り合わせの極限に危険な競技だ! 相手選手も互いに重々承知でボクシングをやっていたのであろう!」

「……お兄さん……。」

「笹川了平……」

「……?」

「その言葉…この先も決して忘れるなよ？」

「……どういうことだ？」

「俺は…お前のいうとおり、ボクシングにおいて最強の名をほしいままにしてきた。…ボクシングは危険なスポーツだ…拳1つで選手の人生を左右することがある。ボクシングをやるからには、命を重く尊いものだと常を感じ、責任を背負って戦わなければならない。だが、当時の俺は…完全にうぬぼれていた。俺の無敗に、メディアも含め周囲は俺の名を大きく掲げた。俺もまんざらでもなく調子に乗っていたんだ……」

「……………」

了平は全く動かず、真剣な顔つきでナツクルの話を聞く。ツナとプリーモは…運ばれた茶菓子に手を付けた…

「その内…試合をしていても、相手選手なんて見えなくなってきた。…見えるのは、再び自身の勝利と、偉大な称号。相手の命など…その当時の俺には、全く眼中から外れていた……………その矢先のことだ」

「拳を封印し神に仕える仕事についたのは、己を戒めるためというわけか。」

「そうだ。笹川了平…お前は強い。俺はリングを通じてお前をいつも見ていただから分かる…だから、同じボクサーとして、究極にお前を誰よりも心配しているのもまた事実だ」

「うむ…礼を言っぞ。ナックル！」

「?!」

「俺から心配いらない。いつも仲間を思い、仲間のために、奮闘する極限に優しい男が、俺の傍にいるからな！」

そういうと、了平はツナの顔を見た。ツナは訳が分からず、首を傾げた

『そうか…デーチモがいるのだな…』

「…沢田は、俺の生涯、二度現れないであろう男だ！俺は、沢田の仲間のために戦うあの強さに何度も極限に痺れた！沢田が道を外さぬ限り、俺も己の道を外しはしない。いや…沢田の進む道を、俺

「達は外させない覚悟だ」

『なるほど、笹川了平とそのほかの守護者達…お前達は俺ら以上に究極に強いのだな。』

「俺が…ボンゴレに入ったのも、プリーモの強さに惹かれたからだ。力も、心も…」

………

「ナツクルといったか？」

「………そうだが…お前は？」

「俺は、ジヨットというんだ」

「俺に何か用か？」

「もう…リングには上がらないのだろうか？」

「……………。ああ。上がらない」

「何故だ？俺は、お前の強さは素晴らしいものだと思っているぞ」

「見れば分かるだろう。俺は今神に仕えし者…人を殺めるこの力など、もう不要だ」

「そうか…参ったな。俺には、お前のその強靱な肉体と精神が必要なんだがな」

「…………強靱？何を言っているんだお前。人を殺し、拳を振るうことに怖れを成してリングを去った俺のどこが強いんだ」

「…………人は、いかなる理由であろうと、自分の好きなものから手を引くことだけは躊躇い、心が迷うものだ。お前はボクシングから完

全に絶って、罪の意識ときちんと向き合っている。強い心がないと出来はしないと、俺は思うぞ」

「……………ジョット、と言ったか…俺に何の用なんだ…」

ナックル…己のためではなく、これから、イタリアの仲間のために…その拳…振るってみる気はないか？

晴から曇り

…ボンゴレ門外顧問組織“CEDEF”

「おかえりなさいませ、アラウディさん」

「お疲れ様です。」

「いまお茶を淹れます」

「…お茶、2つね。」

「は」

「おい…いまアラウディさんの後にいた青年…」

「ああ。若き頃のアラウディさんそっくりだったな…」

「あの青年…アラウディさんの何なんだ？ただの客ではなさそうだが…」

「客な訳あるか…このC E D E Fに限って…」

雲雀が、初代雲の守護者、アラウディの後を付いてたどり着いたのは巨大な建物…中では、まるで企業の一部署のように、7・8人が目まぐるしく動き回っている。雲雀は、アラウディに誘われ、一つの部屋に入る。どうやらアラウディの職場らしい……

「そこ、座ってて…」

アラウディがそう雲雀に指差した先は、ソファ―…だが、雲雀は腰掛けず、巨大な本棚に並ぶ書物の数々を眺めると、一冊手に取り読み始めた。

「名前、キョウヤヒバリ…で、合ってるよね」

「……………」

雲雀は黙って頷いた。

「漢字は、どう書くんさい？」

「……………雲に雀…」

雲雀恭弥にアラウデイ…ただでさえ、無口な2人の揃った部屋は重い空気だった…しかし、その沈黙を破るかのごとく、アラウデイの電話が鳴る

「……………なに。…そうだけど？…東地区に居たよ。…君には関係ないだろ、僕の勝手だ…じゃあね…」

「雲雀恭弥…」

「…なに」

「これからボンゴレ本部に向かう。君を連れて来いってうるさいからね」

「誰が」

「晴の守護者が」

『……笹川了平……』

「あのさ…あんまり人連れ回すと容赦しないよ」

「やめなよ。僕は君と戦う気はないから」

「君…この前自分で強いって言ってなかったっけ…はったりかい？」

「強いよ。少なくとも、君よりはね……」

ムカ……

「ふうん……言っね。じゃあ、試す？」

「…いつかね…」

「…はぐらかさないでよ……」

「……………」。

アラウディはヤレヤレというようにひと息ため息をついた。それを見た雲雀は、ニヒルな笑みを浮かべ、一言付け足した

「…………じゃあさ…君のボスと君…どっちが強いの？」

「……………」

アラウディは一瞬、驚いたように目を見開くと…すぐ元のポーカーフェイスに戻り、口を開いた

「そんなこと聞いて、どうするの？」

「僕の興味のある奴はよく分からなくてね……小動物並みに弱いときもあれば、僕をゾクゾクさせるほどの力を見せてくれたりするからさ。君のボスはどんなのかな…って思っただけさ」

「プリーモは僕のボスじゃない。僕は何かに属するのが嫌いなんだ」

「……………」

「…そうだね…」

「？」

「強いていうなら、“同業者”ってところかな。」

………

「アラウディはな、かつて、俺の情報の全てを消滅・保護してくれていたのだ」

「ナツクル…の？」

一方、ツナや了平は…ナツクルとアラウディの関係性を聞いている

最中だった

「そうだ。俺がリングから去り、神に仕えることを決めた時……究極に俺を周囲から完全に目眩ますよう働きかけてくれたのがアラウデイの組織だった……」

「でも、あの人は…スパイ…で」

「デーチモ、それはあくまでもアラウデイの裏の顔だ。」

プリーモが、ツナに説明を加えた。

「確かにアラウデイの組織は、裏ではスパイの仕事がほとんど。だが、表の仕事の中には、メディアに通じる世間に顔が知れた者が、何らかの理由で日陰者になるとき、その者の素性・場所全ての情報を一切世間に露見させないよう保護したり、圧力をかけたりすることがある」

「なるほど。ナツクルは世間では名の知れた偉大なボクサー……居場所とかバレたら大変なんだ……」

「そうだ。そこでアラウデイの組織に依頼したのが奴との始まりだ」

「それで腐れ縁だといったのだな……」

「継承の証をお兄さんにくれたとき、雲雀さんを見て……昔のお前にそっくりだ”って……言っていましたよね？」

「ああ。究極に似ているぞ。アラウディの奴もさぞかし腹の中ではそう思っているだろう……今こそ、やっとガードを緩くしてくれたが、昔はそれはそれは究極に鬼のような形相と態度だったからな」

「雲雀の奴は極限にいまでもそうだ！」

「ガードって……」

「己と他人との間の壁だ。昔のあいつは、自分に有益だろうが無益であろうが、所構わず口封じだったからな」

ツナは、プリーモとの会話を思い返していた……スパイという立場上、気の緩み・甘さ・馴れ合い……それらが全ていつか自分に牙となつて襲い返ってくる。死と隣合わせの世界でたった1人で戦う者。

それがアラウディだと。それを聞いたから、ツナも少し、アラウディという人物と…その胸中がわかってきそうな気さえたのに、また別の疑問が生まれてしまう。

“なぜ、アラウディはボンゴレ雲の守護者となったのか”

雲が上空と…

「同業者？」

ボンゴレ門外顧問組織、CEDERF—そこでは、初代雲の守護者、アラウディと十代雲の守護者、雲雀恭弥が話していた。

「そう…」

「どういうこと？」

「言葉通りだよ。僕の仕事は、国の諜報。表から裏まであらゆる情報を取り扱って、町を保護する……プリーモとは、目的が一部一致しているだけだよ」

「あの町の様子を見ても、保護出来てとは思えないね…」

「……………」

「……ああ。君だけの組織だけじゃあの町はもう手遅れ。だから……ボンゴレなんかには組み込んだのか」

「……………」

「最強とか謳われてる割に、君も対したことないね……」

「前も言ったが、早合点してもらっては困る。」

「……………」

「僕は、プリーモと同業者と言っただけだ。ボンゴレなんて組織なんかには組み込んだつもりはないし、ボンゴレのいいなりに動いている訳ではない。常に僕の思うとおりにやらせてもらってる。それはプリーモも承知の上」

「……………」。

“じゃあ…なんで” 雲雀はそう言いたげにアラウディを睨む。アラウディは、その意図を汲み取ったかのように言葉を繋げた

「 “じゃあなんで” 雲のボンゴリングを守護する守護者なんて言われてるんだ、って言いたげだね」

「……………」。

「答えは簡単だよ。その方が僕にとって都合がいいからさ」

「……………ボンゴレと群れることがかい？」

「そうだ」

「?!」

「…僕には分からないな…」

「君はまだ若いからだ」

「…関係ないよ」

「ある。…目を閉じ、耳を塞ぎ、自分の内なる真意と向き合えない者に…最強の名も、最良の選択も出来はしないよ」

「……………」

雲雀の元から鋭い目つきがさらにきついものになる。

「ちなみに、僕は元々から最強なんて言われてた訳じゃない。来世…君達の世代まで最強の守護者なんて謳われたのは、あのボンゴレと関わってからだ」

「……………だったら？」

「君だってわかってるはずだけど……」

「……なんのこと」

「“確信”してるんですよ。」

「……。」

真の“強さ”は、ボンゴレ内のみ見ることが出来る

「……。」

「ボンゴレと触れ、あのデーチモと関わることで、君自身の力が巨大化したのは目に見ても明らかだ。そこは君も、まんざら感謝してるのだろうか？」

「……………」

「雲雀恭弥…君にとって何が最良の選択か。考えてみることだね…」

「……………」

「悪いけど、僕のその雲のボンゴレリング。真に強い人間につけてもらわないと面白くないからね。」

「…何、君。僕が弱いとでもいいたいの？」

「さっきも言ったが、君はまだ若いと言っているんだ」

「……………」。

「己を強くするため、“風紀”とやらのために…君自身の、最良の立場に立つことだね……………」

『…僕の、最良の立場…』

……………

口が裂けても言わない…

あの男との出会い…

…僕は、初めて“負けた”

“ジョット”というたった1人の男に…

「…自警団？」

「ああ。まだ結成して間もないが、歪んだこのイタリアの状況をぶっ壊そうと思ってな」

「……くだらないな。君達だけでやんなよ」

「困ったな…アラウディ。俺達にはお前の力が必要不可欠だ」

「僕は、何かに属するのが嫌いなんだ。」

「そうか…なら、こうしよう！アラウディはアラウディで、自警団の中で組織を創ってくれて構わない。必ず自警団にいてはいけないというわけではない。…これでどうだ？」

「話しわかってないみたいだね。君達みたいな訳の分からない組織なんかというより、一人で仕事こなした方がよっぽど有意義だ」

「よし。ならアラウディへの任務は必ずアラウディ一人でこなしてもらおう」

「……君、名は？」

「俺はジヨットだ」

「…ジヨット。僕は死んでも君達と歩みを揃えることはない。」

「ああ。それでいい。」

「……君、何がしたいの？」

「俺は、お前に、自警団に加わって欲しいだけだ」

「…これ以上の会話は無意味だ」

「アラウデイ、仕事を分けるのはどうだ？俺達自警団は表の仕事を受け持つ。お前は裏の仕事をやる。…どんな形であれ、俺達は、町を護りたいという志は同じのはずだ…。」

「……………何がしたいの」

「今、このイタリアに、権力も、金も通用しない。…………町の者と貴族の者の間を、再び不可侵へと持つていかせられる媒体が必要なんだ。お前しか当てはめられない…………アラウデイ。」

「……………。」

「…そのこと全て理解して行動している組織は、現在、“アラウデイだけ”だ」

過去に、僕の情報は一切公にさらしたことはない

誰一人、僕の歩みを妨げさせないように

なぜ、初対面のはずの君がわかる……

ジョット……

…そうか…僕になくて、君にあるもの

全てを包容する力…か…

もう、すでにイタリアの町の者が、みな…君の味方なんだね……

…負けたよ

包容する君と、

拒絶する僕……

僕は君の背中に付こう

決して歩みは重ねない…

僕の正義と君の正義が重なった時…

君は後ろにもたれかかればいい

あとは、僕の役目だ…

守護者帰還

城の中では、ボンゴレ？世・ジヨット。？世・沢田綱吉。初代晴の守護者・ナツクル。十代晴の守護者・笹川了平が、他の守護者達の到着を待っていた……

ガチャ

「……役目は果たしたよ。」

「?! 雲雀さん!」

「雲雀! 極限に無事か!」

「……………」。

雲雀は相変わらず何も返さないが、ツナはひとまず雲雀の帰還にホツとした

「世話をかけたな…アラウディ。」

「…………別に。」

「東地区を、監視下に置いたのだろうか？」

「……………」。

「クス…………東地区の者から手紙が数多く来ているぞ。みな、感謝の意が綴られている」

「たやすくボンゴレの立地を教えるなど、あれほど言ったはずだよ」

「安心しろ。CEDEFのことは言っていない…」

「僕はあくまでC E D E Fとして今回の任務を遂行しているんだ。君がボンゴレの名を挙げたら意味がないと何度いえはわかる」

「俺だって、ボンゴレとして動いているんだ。目的が同じなんだ。仕方ないだろう?。」

「……………全く…変なものに目を付けられても、僕は知らないよ」

「ああ……………わかっているさ。」

「……………。」

「さて、デーチモ。」

アラウディとの会話を終えると、プリーモはツナをよんだ

「?…あ、はい。」

「会つのは2度もだな。雲の守護者、アラウディだ」

「えっと……沢田綱吉です。雲雀さんをありがとうございました」

『……………これが、雲雀恭弥の気にするボンゴレ？世か……。……似ているな。プリーモに』

「別に。」

「アラウディ！デーチモの雲の守護者を保護したら絶対連絡を入れると言っただろう！」

「……………わざわざ電話までしてきて。僕の勝手だと言っただけだ」

「全く……。プリーモとデーチモが究極にどれだけ心配したと思ってる！」

「うるさいな……。僕の知ったことじゃない」

『ああ……。アラウディとナックル…喧嘩始めちゃったよ。プリーモ、止めなくていいのかな？』

心配しているツナをよそに、プリーモは変わらずお茶を飲んでいる。

しかし一方で……

「雲雀！無事で安心したぞ」

「余計なお世話だよ」

「何？！俺が極限に心配してやったというのに！相変わらず可愛げのないやつめ！」

「僕はいま機嫌が悪いんだ。あんまりしつこいとかみ殺すよ。」

『こつちも始めてたあー！？！』

「や、やめて下さいお兄さん…雲雀さんも…」

『喧嘩の内容…なんか似てるし！！』

ガチャ

「全く…またやっているのでごさるか…」

「ツナ！」

「や、山本……っ!!」

続いて帰ってきたのは初代雨の守護者、朝利雨月と十代雨の守護者、山本武だった。

「山本、無事だったんだね！よかったあ」

「おう！ツナも怪我とかなくて良かったぜ。しかしなあ…一番乗りに着きたかったんだけど先輩と雲雀が先かあ」

「デーチモ。拙者が雨の守護者、朝利雨月と申す」

「あ。沢田綱吉です。会うのは継承の時以来ですね」

「そうだな……。見たところ、みな……心身ともに成長しているようで何よりでござる」

「い、いや。そういう訳じゃ……」

「おお。そうだった！プリーモ……頼まれてた品、持ってきたでござる」

「すまない。ありがとう……雨月」

「なんの」

「残るは……Gと、ランポウ、デイモンか……」

「ランポウの奴は、究極にサボっているのではないか？！」

「同感だね」

「うむ…。十代雷の守護者を連れてくるとは考えづらいでござる」

『?!ランボ……』

「みな心配するな…ランポウには、俺がちゃんと電話で念を押しと
いった」

「Gはどうなっている?!」

「あいつがミスをするはずがない。大丈夫だ」

「僕が一番気がかりなのは、アイツだけどね…」

アラウディが眉間に皺を寄せて呟いた。少し不機嫌のようだ

「…デモンでござるか……」

『?!D・スペード…』

ツナには、継承の時の苦難が蘇ってきた…デイモンは、以前リボーンからボンゴレの裏切り者として聞いてきた…現に、デイモンの口から、I世のやり方に反感を持ち、ボンゴレから退去させ、自分だけが引き続き?世の守護者として残留したと聞いた。その邪悪な執念と残虐の持ち主であることは、ツナ達も身を持って体験した…幻覚を使つて、大切な京子たちを人質に取り、ツナたちを黒曜ランドへ誘い込み、彼らを黒曜ランドごと幻影空間に閉じ込めた。結果的に霧の継承は認めてくれたが、そのやり口は…ツナも納得出来なかった。そんなD・スペードが…易々と…骸をこちらに連れてくるのだろうか。ツナには不安がよぎった。

「みな…デイモンは我らの同士だ。そう構えるな」

プリーモだけは柔らかな表情を崩さない。

「どうだか…僕は、彼を認めた訳じゃないからね」

アラウディはまだ不機嫌そうにプリーモに食ってかかる。

「……アラウディ」

「当然でしょ……“彼女”のためだかボンゴレのためだか知らないけど……ああいう手が一番不愉快だ」

『?..?』

「アラウディ。高貴族出身のデイモンはとても役にたってくれている。墮落した貴族達に、デイモンの力はいい薬になっているじゃないか。そういうな……」

「……ふん。君は少し、人を疑うということを知った方がいいよ」

「まあまあ……。いまはそれどころではないのではござらんか?」

プリーモとアラウディを仲裁する雨月をよそに、ツナ達にはまだイマイチ話がつかめない……。その時

ガチャ

「ツナアアアア!!」

「十代目!」

「ら、ランボ?! 獄寺くんも」

「獄寺とランボじゃねーか!」

「極限に全員集まってきたな!」

初代嵐の守護者、Gと雷の守護者、ランボウ……十代嵐の守護者、
獄寺隼人と雷の守護者、ランボが同時に帰ってきた。

「ツナアア！もうおうち帰りたいもんね〜っ！」

ランボはツナの腕の中で大号泣…よほど寂しかったらしい。

「ランボ…よかったあ。帰ってこれて…ごめんな、まだ家には帰してやれないんだ」

「え〜っつ！…イヤだもんね！！」

ゴネるランボに、ツナはただ、“ごめんな”と頭を撫でて励ましてやることしか出来なかった…

「ワガママ言うなアホ牛。十代目も今必死に考えてらっしやるんだ」
「！」

「そうだぜ！ランボ、だから俺たちも一緒に考えよーぜ」

ツナに変わり、獄寺と山本がランボの駄々の相手をする。

「獄寺くん、帰ってこれて良かったよ」

「ご心配おかけして申し訳ありません。十代目……アホ牛とは、途中で会ったので。」

「ふん。あのガキンちょがツナツナうるさいから何かと思ったら、あんたのことだったのね……」

十年後のランボによく似た青年がツナと獄寺に近づいてきた。だが、その髪の色はランボの黒ではなく……グリーン。

「ランポウ、ボンゴレ？世の沢田綱吉だ」

プリーモがツナに代わり、ランポウに自己紹介する。

「うそ？！プリーモそっくりなものね……。綱吉綱吉……。ああ。だからツナか……」

「デーチモ、初代雷の守護者、ランポウだ」

「こゝ、こんにちは……」無沙汰して……ます」

「どうでもいいけど……なんであんなガキンちょが雷の守護者なわけ？」

「え？！えつと俺もよく……勝手に、というか……流されたというか……」

「ランポウ……これが、デーチモ達の意志だ。ここまで継承が進んでいるこいつらに、過去の俺達がどうこういうことじゃないだろ。」

Gがランポウにフォローを入れてくれた……

「デーチモ。久しぶりだな……初代嵐の守護者、Gだ」

「えつと……改めて、沢田綱吉です。獄寺くんをありがとうございまして。」

「なに、なんてことないさ。このくらい」

おや？…前言撤回してくれなくては。
…G

？！

ガチャ

「このボンゴレの跡取りとなれば、それ相応の力と知恵と覚悟を備わって頂かなくては……」

「帰ったか……デモン」

『『『『D・スピード!』』』』

最後。ついにツナ達の前に現れたのは、初代霧の守護者、D・スピード……

「ただいま帰りました。少し、出遅れてしまいましたかね……」

「大丈夫だ。忙しい中よく帰ってくれた…デイモン」

「任務は終わっていますよ。プリーモ」

「デイモン……ボンゴレ？世の沢田綱吉だ」

「ああ。そうでしたね……初代霧の守護者、D・スペードです」

「……………えっと……」

ツナに不安の顔が浮かぶ……第一印象があれなだけあって……顔も合わせずらければ、今更何を話したらいいのかも分からない。それより気になったのは……

「あの……………む、骸は……」

「…ここにいます。」

「?!」

「おお！戻ったか！！骸、極限に心配してたんだぞ」

「ツナ、これで全員揃ったな！」

「う、うん…ひとまずはね。骸…怪我とかない……………どうしたの？」

「……………どうとは？」

「なんか……………疲れてない？お前」

「そっいゃ、言われて見れば…な…」

「……………大丈夫です」

『完全にやつれてやがる、骸の奴』

『……ふん……いい気味だね……』

ちゃんと心配するツナや山本、笹川をよそに、酷い腹の中の獄寺と雲雀……ランボに至っては、ツナに会えた安心感からか疲れて寝てしまった。

そこにプリーモが近づいてきた

「デーチモ。守護者全員無事揃ったな」

「あ……はい、皆さんのおかげです。ありがとうございます。あの……それで、このメンバーで話したいことがあるので、別室を貸してもらえると嬉しいんですけど……」

「ああ……。そうだな。隣の部屋を使うといい。終わったら、知らせてくれ」

「はい。じゃ……ひとまず、失礼します……」

初代

―初代ボンゴレ

ツナ達が隣の別室に移動したところを見ると、初代も各自会議室の席についた。

「さて、全員座ったな。会議を始めるぜ」

毎回会議の進行役はGが務めている。

「デーチモとその守護者が来たことは全員知っているな？とりあえず、バラバラになったデーチモの守護者達を集合させることが出来た。だが、プリーモから先日言い渡されていた任務が各自あったはずだ。その経過を報告をしてもらっ……雨月」

「拙者は終了しているでござる。プリーモにも伝えてある故、問題ない」

「次、ナツクル」

「俺はまだだ。現地に向かう途中で笹川了平と出くわしたからな…
目的地にすら着いていないから究極に報告することもない…すまん
な…」

「わかった。とりあえず、デーチモ達の問題が片付いてからだな…
次、アラウデイ」

「……終わってる。プリーモも知ってるはずだけど？」

Gは確かめるべくプリーモを見た…

「大丈夫だ。G、アラウデイの進行には俺からは一切手を出さない
ことにしているから、アラウデイに任せてくれ」

「…わかった。じゃ次、ランポウ……ランポウ！」

「…ん……………んあ？」

「ランポウてめえ！寝てんじゃねーよ！」

「やだなあゝ…寝てないものね…」

「ムニヤムニヤしてんじゃないかねーかよっ!」

「これが俺様だものね……」

「……おい……」

「ランポウのことだ……任務も究極にやっていないのであろう?」

「……ん」

「反論もしねえのかよっ!」

「まあまあG。良いではないか。ランポウは、デーチモの雷の守護者を、きちんとこちらまで案内したでござる。守護者としての使命は、果たしているでござる」

「G、俺もそれで十分だ……」

フリーモが許可を出すと……

「ちっ！てめえらはランポウに甘過ぎんだよ…ランポウ！この件片付いたらちゃんと仕事しろよ！」

「……わかってるものね……めんどくさいなあ」

Gは不服ながらも、最後のデモンに報告を求めた

「ヌフフ…私も任務は終わっています。西地区の町の復興の観察及び敵の動向の監視でしたが、あちら側は、我々ボンゴレに手を出すつもりはないようです。」

「そうか…西は一段落つてところだな……デモン、引き続き、西地区は任せる。少し本部と距離はあるが、任せていいんだな？」

「承りました」

「異論はねーな？……アラウディ。」

と、Gは不機嫌そうなアラウディを見た……

「…………ふん…………別に。」

「…………はぁ…………最後に俺だが、俺は、敵陣で獄寺隼人と出くわしちまったから、任務はまた全て終了してねえ。だが、東地区の一握りのお偉さん方は、俺たちに対してまだ納得してねえみたいだ。わざわざ他のマフィア金で雇って、俺たちの動向探ってるみてーだからな…………」

「G」

プリーモが静かに口を開いた……

「なんだ？プリーモ」

「なら東地区の一件は全て、アラウディのC E D E Fに任せてボンゴレは手を引いた方がいい」

「何?!」

驚くGに対して、アラウディもプリーモを一瞥した

「ちょうどアラウディから、東地区をCEDEFの監視下に置いたとの報告を受けた。まだ東地区とは長期戦になる。ここはボンゴレとして大きく動くより、CEDEFで進行していった方がこちらも動きやすいはずだ」

「…………アラウディ、お前、いつの間に」

「……………」。

アラウディは未だに口を開こうとはしない…

「…どうだ、アラウディ…」

「…僕は僕の好きにやらせてもらう」

「なら、俺の一存で悪いが…東地区はボンゴレからCEDEFに任せることとさせてもらう」

「全く…お前はまた勝手に……」

「すまない。G……」

「まあいい。それで事が上手く運んでくれんならな」

「アラウディに限ってミスはないでござる。心配いりもつさぬ。」

「はあ……あー……はいはい。そうだな…次に、デーチモ達についてだが、プリーモ。何か言うことはあるか？」

「ああ。…みんな…今回、リングを通してこちら側に来たのはデーチモ達だ。…俺達は、デーチモ達が無事に帰れる為の手立てしかしてやれない。それはみなよく分かっていると思う……あくまでデーチモ達最優先。各自の任務はその後だということだけは忘れないでほしい。」

初代（後書き）

ただの初代達の会議風景でした（－|－）

前話に少しエレナをちらつかせましたが……なんか後にも先にもたぶんあれで最後だな笑

初代達の会議って少し堅そうですね……。アラウディとかDいる分余計。そこで居眠りとかしてた（ドラマCDで）ランポウって、やっぱりランボ同様……太い神経してんだがしてないんだが……って思った。

十代

一方…十代ボンゴレ

「骸…大丈夫?!」

「極限に何があったのだ?」

別室を借りたツナ達は、改めてどうやったら元の自分たちの世界に帰れるのか話し合うことにした。だが…帰って早々に疲れ顔が目立つ骸がツナは気になっていた

「これはあくまで僕の憶測ですが、我々が飛ばされたこの時代…ボンゴレが結成されてまだ日が浅いかと…」

「えっ?!」

「まじかよ…」

「骸、てめえ何を根拠に」

「まず一つは、霧の守護者、D・スペードです。」

「あいつがどうしたというのだ？」

了平同様…ツナ達も根拠がいまいち汲み取れない。骸の説明がはじまった

「初めて彼と顔を合わせたのは継承の時、僕はクロームに憑依していたので少ししかD・スペードという男を把握していませんが…あなた方なら、彼がどのような男なのかわかったはずですよ」

「う、うん…。デイモンは、I世をボンゴレから退去させて、自分だけが残って？世の世代とそのあと守護者としてついてみたい…」

「全ては、強いボンゴレを創るためとか何とか…プリーモや十代目のお考えを完全否定してきやがったからな……」

「すげー執念だったのを覚えてるもんな、ツナ…」

「う、うん…。そ、それが？」

「僕は、半日彼と行動を共にしましたが…確かに、今の彼にもボンゴレに対する執着心というものは言動から窺えました。けれど、引かなかったのは…以前に我々が会ったデイモンと、今僕らの前にいるデイモンに、若干違和感があります。」

「…違和感？」

「なんの違和感だ？骸」

山本も了平も興味津々に耳を傾けている。興味がないのは雲雀だけ…。呑気に雲を眺めている

「沢田綱吉のいうとおりならば、以前会ったデイモンはボンゴレに対し不信感と怒りを持ってボンゴレ？世を退却させたそうです…僕が今回会ったデイモンは、ボンゴレに異様なまでの尊敬や崇拜の念を感じました」

「そ、尊敬?!」

「ボンゴレは“完璧”だと、そればかりでしたからね…」

「プリーモを、デイモンは尊敬してるって言ってたの?」

「そういうことです」

「十代目、俺たちが継承で会ったデイモンからは考えられない発言です」

「それで骸は、俺たちが飛ばされたこの時代は…ボンゴレが結成してまだ若いって踏んだのな…」

「なるほどな…たとえあれだけの残虐な執念をボンゴレに持ってたデイモンとはいえ、最初からボンゴレにいた以上、特別な感情無しにはいないってわけか…」

「ええ。」

「…で…マフィアを忌み嫌う骸にとって、長々とマフィアの自慢話聞かされちゃ…そりゃあ参るわけだね…」

「……それ以上は言わないで頂きたい」

「…言われてみたら、結成して日が浅いって言うのも分かるかもな…」

獄寺も納得げに口を開いた…

「どうして？ 獄寺くん」

「Gの奴見てもそうだったんですが… みながみな、互いに疑心暗鬼だったような気が…」

「あっ！ それは俺も思ったぜ」

山本も同意だった。

「初代ボンゴレっていうくらいだし。もつと強い絆みたいな想像してたんだけど… なんか堅い空気だったよな」

そういわれてツナもさっきの守護者の集合の際の風景を思い描いていた… 確かにみな、互いにまだどこか信じきれていない仲だった。ブリーモも、1人1人に対する態度が少し遠慮がちにも見えた。今での話を総計して考えても、骸の予測は当たっているとみて間違いないようだ。

「えっ… と… ここがボンゴレが結成されてまだ間もない過去のイタ

リアっていうのは認めるとして…どうやって帰るか、だけど…」

「十代目、俺は、てっきり守護者全員集まれば帰れるものかとばかり…」

「うむ！極限に俺もそう思っていたぞ！沢田」

「すみません…実は俺も…」

「リング通してこっちに来たってことは、何か、ここに俺たちが来るだけの理由があるってことじゃねーのか？」

珍しく山本が筋の通ったことを口にした

「偶然じゃないってこと？」

「?!」

ツナが言ったの同時に、雲雀が動き出した

「どうしたんですか？雲雀さん……」

「……………」

「……………雲雀さん？」

ガシャンッ！！　バリーン！！

？！！

「おいっ！！！！」

「極限になんだ？！！！」

「ひっ雲雀さん？！」

雲雀はいきなりトンファーを構えると、窓ガラスを割り外へ飛び出してしまった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639y/>

時間 トキ を越え

2011年12月31日06時48分発行